

## VII 北九州石蓋土塚墓について

さきに北九州（福岡・佐賀・熊本）における石蓋土塚墓の簡単な地名表を掲げたが、本地名表は既発表資料の主要なものに重点を置いたため、実際の遺跡を相当に下回ったものと考えている。ことに豊前地方の例はかなり粗漏となっている。これらは今後集成を重ね完全を期したい。

以下にこの地名表に対する若干の解説を加えてみたいと思うが、調査例にくらべて資料の発表数のきわめて少ない現状を考える時、既発表資料の中からは、例えばプランにおける舟形塚と箱形塚の問題など『塚』そのものの形態に検討を加えることには無理があると考えるのでそれに関しては一切触れないことにする。

ここで言う石蓋土塚墓とは土塚墓のうち長方形ないしは長楕円形の平面プランをなし蓋に石材を利用したものを指す。また小口の一端ないしは両端、長側壁の一部に石材を用いている例、すなわち箱式石棺墓とは異なり本来四壁に石材の充足していないものも石蓋土塚墓に含めている。いわゆる磐棺墓は土の代りに岩盤に掘り込んだものであり土塚墓と区別する要素はないので例中に含めている。ところで、かつて鏡山猛は失蓋・無蓋の土塚蓋をも含め土塚墓の総称として石蓋土塚墓の名称の使用を提倡したが、<sup>(1)</sup>現在では土塚墓も調査例を重ね、失蓋と言われたものが木棺墓ないしは木蓋土塚墓、無蓋土塚墓はまさに無蓋であることが明らかとなってきた。

これらは時期的に重複しない部分もあり、石蓋土塚墓として一括することは現在ではできない。したがって、現在では、蓋に石材を使用した土塚墓のみを石蓋土塚墓と称すべきである。

時期 鏡山猛の論考や九州考古学会の地名表には弥生時代前期に属する例があげられているが、それらの多くは支石を伴なわない一種の支石墓であるなどここで言う石蓋土塚墓の条件を満たさず、別に考えるべきものである。石蓋土塚墓として報告されている福岡市博多区月隈遺跡は袋状ピットの再利用とされているが<sup>(4)</sup>ただちに石蓋土塚墓としてよいかどうか疑問が残る。板付II式壺形土器片と伴出した磨製石剣を副葬品と解し墳墓である論拠としているが、磨製石剣が袋状ピットから出土する例はすでに知られている。いずれにしてもここで扱う石蓋土塚墓と直接の関係を云々するような存在ではないと言えよう。中期に属する例としてとり上げられているものに宗原、石ヶ坪、中道の諸例がある。宗原遺跡では石蓋土塚墓5基と箱式石棺墓4基、土塚墓1基が群集し、1号箱式石棺墓に近接して城ノ越式の小児甕棺墓が出土した。従ってこの墓地を中期初頭と考える可能性もあるが、甕棺群集墓地の盛行する北九州の中心地域では確実に中期に属する箱式石棺墓の例はなく、甕棺墓の衰退する後期以降普遍的になるという事実を考えるならば即断することはできない。石ヶ坪4号土塚墓は中期以前の所産とされるが、明確な根拠にとぼしい。中道遺跡例も共存する壺蓋土塚墓の蓋に使用された壺形土器が不明であるので中期とする積極的な根拠はない。いずれにせよ弥生時代中期ないしはそれ

以前に属すると考えられている石蓋土塙墓は厳密に検討を加えれば時期を裏づける根拠に乏しさがみられる。

副葬品などによりある程度確実な時期の判定できる例が若干ながらみられる。日佐原遺跡は共存する甕棺墓が弥生時代後期終末に位置づけられ、またE-15号石蓋土塙墓出土の長宜子孫内行花文鏡などの遺物から後期終末～古墳時代初頭と考えられる。八並D地点は共存する甕棺墓が後期終末に属し、箱式石棺墓中の一基から小形内行花文仿製鏡が出土するなど、後期終末前後に位置づけられる。祇園山1号墳は墓地の在り方、また共存する甕棺墓からやはり後期終末前後の時間を与えることができるが、むしろ古墳時代に入るものと考えられる。箕田上所田遺跡では長宜子孫内行花文鏡片と三角縁鳥文鏡が副葬されており後期終末～古墳時代初頭と考えられる。石ヶ坪遺跡では小形内行花文仿製鏡が出土しており、後期中頃～後半と考えられる。

以上のように時期の明らかな古期の例は弥生時代後期終末前後に集中しているといえる。しかし甕棺群集墓が後期前半まで姿を消すがその後も形を変えて共同墓地が営まれ続けること、副葬鏡種の中に石ヶ坪の小形内行花文仿製鏡のように後期中頃～後半に位置づけうるものがあること、あるいは宝満尾遺跡14号石蓋土塙墓に素環頭刀子が副葬され共存の土塙墓から後期前半にさかのぼらせうこと<sup>(6)</sup>、報告してきたように小笛遺跡では共存する土塙墓へ供獻祭祀された土器が後期前半頃に編年されること、などから石蓋土塙墓の上限は後期前半～中頃まで上らせることが可能である。

石蓋土塙墓には明確に古墳時代に属するものもある。炭焼4号墳は石蓋土塙を内部主体とする方形周溝墓で、出土した土器やその他の諸条件から調査者は4世紀後半に比定している。油田石蓋土塙墓はそれ自体には時期を示すようなものはみられなかったが、遺構の切り合いによって調査者は4世紀中頃～後半より以前と判断している。また松尾1号墳の周溝底につくられた石蓋土塙墓も伴出の土器から古墳時代初頭を大きく降るものではないと考えられる。上官塚遺跡では弥生時代の甕棺墓・箱式石棺墓の群集地内に棺材利用の石蓋土塙墓が営まれ白磁が副葬されていた。<sup>(7)</sup>これが今のところ下限であるといえるが時期的にかけはなれており系譜をたどることはできない。

現在までの資料によれば、石蓋土塙墓は弥生時代後期前半～中頃に出現し、後期終末前後を中心としておそらくとも4世紀末には衰退していったと言える。

**分布** 地名表に収録した66遺跡を平野単位にみると、福岡・朝倉両平野（計20遺跡）、豊前の周防灘沿岸部（19遺跡）が圧倒的に多く、山鹿・玉名を中心とした熊本県北部（8遺跡）がこれに次いでいる。このような筑前・豊前地区への石蓋土塙墓の集中は単に数的に多いということのみではなく、他地区にくらべて副葬品を有する点においても異なっている。ことに豊前地区には鉈を副葬する例が多く、北九州市小倉区長行字郷屋の郷屋古墳群などでは石蓋土塙墓の多くに鉈が副葬されており、特徴的である。鉈の副葬は中期後半の立岩遺跡10号・36号甕棺墓

<sup>(8)</sup>

を初例とし、後期以降かなりの類例がみられるが、豊前地区での集中は特異なものがある。後期以降に盛行してくる石蓋土塙墓はその地域における前代の墓制との間にも興味ある分布を示している。弥生時代前期末～後期前半の唐津・糸島・早良・福岡・飯塚・朝倉・筑後・佐賀・肥後北半部の諸平野は甕棺墓が群墓をなし、豊富な副葬品を有するなど多少の地域性は認められるものの北部九州甕棺墓社会とでも称すべき共通性をもっている。これらの諸平野では箱式石棺墓は弥生時代後期を待たねばみられないが、逆に豊前地区などの甕棺墓地域の外側では前期以来箱式石棺墓を主体としている。このように石蓋土塙墓の主たる分布地としての福岡・朝倉両平野と周防灘沿岸部とに、前代の葬制は大差があるが、後期にはいるとともに両地ともに箱式石棺墓・石蓋土塙墓が中心となってくる。<sup>(9)</sup> 舶載鏡・仿製鏡の分布関係にみられる北部九州甕棺墓社会による北九州の統一の現象とは逆の、<sup>(10)</sup> 北部九州における箱式石棺墓の採用と両地に普遍化する石蓋土塙墓との分布の問題は単なる分布の濃淡以上の問題をはらんでいるものと考えられよう。

なお、南朝鮮の慶尚南道金海邑の鳳凰台に石蓋土塙墓が知られているが、<sup>(11)</sup> 北九州のそれとの関係を論することはできない。

**箱式石棺墓との関係** 弥生時代の石蓋土塙墓はそれのみで群集することはまれで、箱式石棺墓・土塙墓・甕棺墓などと共に存して共同墓地をなすのが一般的である。墓地の構成を考えられる程度の調査をされた日佐原・八並・祇園山などの遺跡でみると箱式石棺墓が大部分を占め、箱式石棺墓との関係がより強かったことをうかがわせる。甕棺葬が衰退したこの時期としては当然のことであろう。石蓋土塙墓にくらべ箱式石棺墓は副葬品の出土率が高く、八並D地点では箱式石棺墓のみに副葬がみられ、石蓋土塙墓のみからなる日佐原B群に副葬品がないなど、若干の優位性を持つように考えられないこともない。しかし日佐原墓地内でより高位にあるE群では石蓋土塙墓は箱式石棺墓と共に存し、小盛土と副葬品をもつ7号箱式石棺墓とともにこの墓地中最大の副葬品をもつ墳墓が15号石蓋土塙墓であることや、日佐原・上所田・石ヶ坪のように舶載鏡・仿製鏡の副葬のみられること、さらに墓地内での在り方に差が見出し難いこと、などから基本的にはこの時期には格差はないと言える。

ところが古墳時代にはいると、石蓋土塙墓が古墳の内部主体となることはほとんどなくなり、唯一の例である炭焼4号墳も土塙は小児用かと思われる小形のもので蓋も大形の板石一枚という特異なものである。放光寺古墳群のように箱式石棺を内部主体とする円墳の墳裾に3基當まれたり、松尾1号墳のように方形周溝墓の周溝内につくられるなど、明らかに箱式石棺墓が石蓋土塙墓にくらべ優位に立つにいたっている。このような両者の間における優劣・格差の発生が石蓋土塙墓の衰退と密接に関係しているものと考えられる。

- 註 (1) 鏡山猛「石蓋土塙に関する覚書」(史淵56) 1953
- (2) 註(1)文献
- (3) 小田富士雄編「九州地方土塙墓地名表」(九州考古学1) 1957
- (4) 折尾学『福岡市金隈遺跡第二次調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書17) 1971
- (5) 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」(考古学雑誌58-3) 1972
- (6) 福岡市教委山崎純男氏の御教示による。
- (7) 済々齋高校伊藤奎二氏の御教示による。
- (8) 小倉高校山中英彦氏の御教示による。
- (9) 註(5)文献
- (10) 藤田亮策・梅原末治『朝鮮古文化綜鑑(-)』 1947